

馬場孤蝶

あの頃の

川上眉山君

あの頃の川上眉山君

「明治二十九年一月七日午前九時十二分といふに（国府津行の汽車は九時十二分と覚ゆ）新橋停車場に車を乗付たる人を誰と思召し候ぞや。長身六尺ひよろくとして楊枝のお化の如く眼鏡の下より八方を見渡せども笑止や尋ぬる人の影だに見えず、上等待合室中等待合室そこから八面間の抜けたすりのやうな目付でうろつく。折しも後より声を掛たるものあり、それかとばかり振返れば、あらず、京の藁兵衛と名乗る。しばらくありて又々声を掛

くるものそれも違つて高田商会の社員なり。やゝありて又々声を掛くるものそは春亭九華なり。あること幾時遂に馬場孤蝶子を見ず、藤村子秋骨子猶更の事なり。茫然として夢を見たるが如く立歸りたる此時のさまを君は何と思ひたまふや。塵途忙々事にまぎれて未だ音をも接せず、越えて数日君が江州よりの信にあふ。されども思へずは君が既に彦根にあるを信ずる能はざるが如き心地するを。すでににして又君が江畔よりの書に接す。君が情に感じて直に書を裁せんとしたるを人に妨げられ荏苒じんぜん今日に至りて証文の出し遅れのやうな事をいふ。この詩人の

間の抜けた処なるべし。いひたいことはまだ澤山あるんだけど、今又用が出来てこれから出掛けねばならぬ。
よんどころな無^{よんどころな}拗く中止して後便に譲る。 草々

二十七日

亮

勝 弥 様

大磯の空はいかゞなりしや。国府津行の又引返しなどは頗る怪しいぞ。楽々園の写真版が日用全書の中にあつたから切抜いて封じ込めた。いゝ処ではないか。君はこんな処にゐて不足をいふのは間違つた事だ。」

これは年四十そこそこで不幸な終りを告げた眉山川上亮君の手紙である。僕は明治二十八年の秋から彦根の中学校の教師に雇われて行っていて、冬休みに東京へ帰り、それからこの手紙にある通り一月の七日に彦根へ向って立った。文中にある通り時間の間違いか何かで折角見送りに来てくれた川上君に無駄足をさせてしまったのだと思う。

川上君はかなり骨太な体格であったが、肥満しているという方ではなかったので、身の丈が五尺七八寸は確か

にあつたために一寸見るに細身のように見えたのだ。京の藁兵衛というのは堀という人であつたと思う。『滑稽類纂』という小咄を集めた著書がある。春亭九華は丸岡氏で、硯友社の始め頃、『我楽多文庫』に二三の著作が表われていた。藤村子、秋骨子は勿論島崎、戸川の両君であるが、僕はこの時両君と一緒に湘南あたりへ出掛けたか、どうか更に記憶がない。楽々園べっしよというのは御承知の彦根の城の下にある井伊侯の別荘であつたところで、その時分は勿論今日の如く料理屋兼旅館になつていた。日用全書というのは博文館から出ていた、今日でいわば

家庭叢書と書いていいようなもので、樋口一葉の『女子日用文』などもその一卷を成していたのだ。

川上君はこの手紙の時分は、小石川上富坂四十番地に住まっていた。三浦梧楼氏の屋敷の横手の通りの坂の降り口の左り側の道に直ぐ沿った家であった。そこには高瀬文淵氏が同居していた。僕が川上君を知ったのも、その家であった。平田禿木君に連れて行って貰ったと思う。多分二十八年の三四月頃であつたらう。

僕はその時分本郷龍岡町十五番地に住んでいたの、川上君が二遍ほど泊つたことがある。始めて泊つた時に

川上君は、

「寝ていて飛んでもない大きな声で叫ぶ癖が僕にはあるのだから驚いてはいけない」と云って床へ入ったけれども、僕の家では一度もそんなことはなかった。

その家の隣は僕の親類の住居であつたので、塀を切り開けて交通していた。隣では僕の親父のために、庭の南端へ弓を射る場所を造って置いてくれたので、或る日そこへ川上君を案内した。川上君が弓を引いている形を見ると、いかにも引きが足りない。そこで「もっと引き給え。もっと引き給え」といって引けるだけ引かした。そ

ここで矢が放れるとほんと弓返りがした。川上君は「始めて弓返りがした」と云って、大喜びであつた。「尾崎と一緒に弓を引いたんだが、あの男は、そこがいけない、ここがいけないとやかましくばかり云うので手も足も出なくなつてしまふ」と云って川上君が笑うので、「そう一遍に云つたところで直せるものではない。根本だけきめて置いて、あとは進歩に従つてそろそろ直すんだね。弓返りのしなかつたのは引きが足りなかつた為めだ。これからやるんなら今日のように何処までも引張り抜くという心持でやり給え」と云って僕も笑つた。けれども川

上君と弓を引く機会はそれきりなかったと思う。

川上君が樋口一葉と知ったのは富坂にいた時分であった。一葉の日記によると、それは二十八年の五月の二十六日のことである。時間は午後の三時頃で、平田君と僕
の三人が一葉を訪ねて夜の九時頃まで話し込んだとある。

川上君のお父さんは本郷春木町に住まっていたそうだが、それが亡くなったのは二十九年の四月頃であったのである。川上君の実母だった人はもうとっくにいなくなっていて腹異いの若い弟さんなどが大勢あって、その

始末には川上君はなかなか苦心していたようであつた。富坂の家を畳んで旅へ出たのは、その年の暮近くであつたろう。名文『ふところ日記』を書いたのはその旅中であつた。それから牛込の南山伏町に家を持ち、間もなく北山伏町へ引越し、そこで三十五六年頃に結婚したように記憶する。

川上君は如何にも美しい文章を書く人であつた。そういう方では『ふところ日記』が代表的作品といつていいであろうが、殊に俳文だった短い文章に才氣横溢するものを見る。尾崎紅葉君の友人門下から成っている藻社の

名で、紅葉の霊前で読まれた祭文が金玉の文字と云うていい程の美しいものであるが、これは眉山君の筆になったものである。

川上君は字のうまい人であつた。紅葉君と同じ流儀の字である。紅葉君は蜀山を習つたそうなんだが、川上君も矢張りそうであつたのではなからうかと思う。硯友社の諸君は大抵罫引きの原稿紙は用いなかつたようだ。いい半紙の下へ罫を引いた紙を入れて置いて、その上から書いた。で、あとで罫を引いた紙を取つてしまふと、原稿は白い半紙の上へ字数を揃えて書いたものになる。川

上君の原稿などは旨い字で書いてあったので、いかにも綺麗なものであった。

川上君は話声なども優しい人当りのいかにも柔かな人であった。従ってよくものを堪えた人であつて、自分の境遇などをあまり人に打ち開けなかつた。そういう風で、人知れぬ苦悶が多かつたのである。酒はかなり強かつたようだ。三十前後の時分には一升位は飲んでもそう乱れはしなかつたようだ。

兎にも角にも、川上君の作物は明治文学中の最も勝れたる文章の一つとして残るべきものであることは疑いが

ない。僕などは唯徒らに老境に入ってしまったって、依然として文筆を執って陋巷に蟄しているのだが、こういう手紙を読み、吾々の三十前の交友を想い、当時の川上君のことなどを追憶すると、まことに感慨に堪えない。

序ついでに、明治二十八年十月二十二日の消印のある川上君の葉書を見出したから書添える。

うたゝ寝の夢にまたもや君を見申候。枕頭の秋いとゞ身にしみ候。いよく君を見まほしく候彦根はいづこ、雲の外、思へども見えず、望めども見えず。

あふことはかたしく袂今宵もや、夢をまことの身をたのむべき

などと女めきたる愚痴になり候。この心を何と申すべき御一笑下さるべく候。

日本文学電子図書館

あの頃の川上眉山君

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館